

ミカン生育情報

千葉県
平成 29 年 7 月号

平成 29 年 6 月の気象

平成 29 年 6 月の半旬別の気象を表 1 に示した。平均気温は、第 3 及び第 4 半旬を除く 4 半旬で平年と同じか上回った。月平均気温は 20.9℃で、平年より 0.2℃高く、前年より 0.1℃低かった。

降水量は第 5 半旬を除く 5 半旬で平年を下回った。月合計は 151mm で、平年の 62%、前年の 55%であった。

日照時間は第 1、第 4 及び第 5 半旬で平年を上回った。月合計は 163 時間で、平年の 123%、前年の 119%であった。

梅雨入りは 6 月 7 日ごろとされ、これは平年より 1 日早く、前年より 2 日遅い。

表 1 平成 29 年 6 月の気象 (暖地園芸研究所)

半旬	平均気温 (°C)			降水量 (mm)			日照時間 (hr)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	20.6	19.7	19.2	2	26	2	52	29	36
2	20.9	20.1	20.3	8	29	16	25	26	21
3	18.8	20.3	20.9	16	47	49	18	22	26
4	20.5	21.2	22.6	22	44	11	41	20	23
5	22.3	21.1	22.1	94	55	161	24	18	12
6	22.0	22.0	21.0	10	43	36	4	19	19
平均/計	20.9	20.7	21.0	151	244	273	163	133	137

果実及び樹の生育

本年の着果量は早生温州、普通温州とも前年より多い。前年は裏年傾向だったため、本年は着果量が多い傾向であるが、着果量が過多になっている樹は少ない。発芽期や開花期は遅れたが、気温が高く推移しているため、生育は前進傾向である。果実肥大は順調で、生理落果量も平年並みである。6 月下旬には早生温州の 1 次生理落果のピークが終了した。温州では老木化による樹勢の衰え、中晩柑では前年の着果負担から回復していない樹が見られた。

病虫害の発生状況としては、6 月中旬ごろからゴマダラカミキリムシの成虫を見かけるようになった。暖地園芸研究所に飛来する果樹カメムシ類は現在のところ少ない。ダニ類の発生は現在のところ少ない。温州におけるそうか病の発生は少ない。レモンや中晩柑における、かいよう病の発生程度は無～軽である。なお、かいよう病の伝染リスクが高くなる、降水*を伴う風の風速 6 m/s 以上*の日は 6 月に 6 日あった。

※：館山測候所調べ、便宜上降水量 0.5 mm 以上の日

*：館山測候所調べ、便宜上最大風速

7～8月の栽培管理

・**摘果** 園地や樹によるバラツキがあり、それぞれの樹にあった摘果が必要である。摘果は粗摘果、仕上げ摘果の少なくとも2回行う。

着果量が少ない樹では、早生温州、普通温州ともに粗摘果は行わず、他の樹よりも遅めに仕上げ摘果を行うか、収穫1ヶ月ほど前に樹上選果をする。

着果量が中程度の樹で間引き摘果する場合は、早生温州、普通温州ともに内なり、裾なり、ふところなりの果実を摘果し、病害果、虫害果、キズ果等の外観不良果を優先的に、全体を軽く間引き摘果する。普通温州は早生温州よりも軽めの摘果とする。

着果量が多い樹では、早生温州では、内なり、裾なり、ふところなりの果実を全摘果し、樹冠表面の外観不良果、大玉果、小玉果を間引き摘果する。普通温州では果実が肥大しやすいため枝別摘果とし、着果させる枝は軽く摘果する。

摘果の程度は、最終的な着果量の目安が1果当たり葉数で早生温州は25～30葉、普通温州は20～25葉で、この時期の粗摘果ではこの50%程度に摘果する。仕上げ摘果では、大玉果、小玉果、キズ果などを取り除き最終的な葉果比を目指す。

7月中には粗摘果を終了する。粗摘果終了後、仕上げ摘果に移る。9月以降に仕上げ摘果を行うことで、樹体への負担は大きくなるが、大玉化が避けられる。

中晩柑の摘果は品種によって大きく異なるので、事前に調べてから摘果をする。ただし、一度着果負担で樹勢を落としてしまうと回復しにくい品種もあるので、5月頃から調べ始め、葉色の黄化など樹勢低下をさせる前に粗摘果を始められるようにする。

・**マルチ資材の被覆** 高品質果実の生産にマルチ栽培は有効である。被覆の時期は、早生温州は7月下旬、普通温州は8月上旬を目安に開始する。土壤の乾きやすさや灌水設備の有無によって、被覆開始時期や地表面に対する被覆割合を調節する。マルチ栽培の適地は、水はけと日当たりが良く、着果量が中程度以上の園地である。土壤水分把握の目安となるものとしては、pF値を測る土壤水分計や葉裏に張り付けるシートがあり、そういった器具の活用も検討する。

・**極早生温州の日焼け防止** 極早生温州や「せとか」の樹冠上部の果実については陽光面の果面が日焼けによって色があせたり、褐変することがある。白色のテトロン製果実袋などで物理的に遮光することにより、日焼け果の発生率を軽減できる。

・**病害虫の防除** ※防除に際しては、千葉県農作物病害虫雑草防除指針を参考に行う。

かいよう病 かいよう病多発園では、薬害に注意しつつ、予防目的で銅水和剤（クレフノン加用）を散布する。特に台風の襲来前には予防的に散布を行う。また、夏梢に発生するミカンハモグリガの防除も行う。

黒点病 幼果期から成熟期にかけて感染、発病する。発生源は樹上・園内及び周辺の

枯枝なので、丁寧に枯枝を除去する。ジマンダイセン水和剤／ペンコゼブ水和剤の予防効果は降雨によって低下するため、散布からの累積降水量 250mm 前後を目安に次の防除を行う。園地によって降水量は異なるため、自身で簡易的な雨量計を作成し防除の目安とする。

ミカンサビダニ この時期から9月まで果実を加害する。被害が拡大する恐れがあるため、果実1～2個の被害を見たら直ちに防除する。特に、樹冠の内部・上部など薬剤のかかりにくい部分に発生が多いため、摘果時に注意深く見る。

ミカンハダニ 果実や葉を加害する。重要な防除時期は梅雨明け期であるが、気象条件によって早晚があるので注意する。寄生葉率が30%以上になった時点で速やかに防除を行う。

果樹カメムシ類 果実を加害し、落果や品質の低下を引き起こす。日暮れ頃園地を見まわり、飛来量を観察する。飛来量が多い場合は防除をする。防除は、動きの緩慢な朝方か、飛来量が多い夕方に行う。

ゴマダラカミキリ 樹の枯死の原因となることがある。成虫が発生する時期でもあるため、見つけ次第補殺する。発生が多い場合は6月下旬～7月下旬に薬剤防除を行う。

ツノロウムシ幼虫 発生が多い園では、7月中下旬に薬剤防除を行う。

※なお、登録内容が中晩柑・レモンと温州ミカンで異なる薬剤があるため注意する。また、近接散布に注意が必要な薬剤もあるためラベルを良く読み使用する。

なお、表の数値は表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計は一致しない場合がある。

《 生育情報の問合せ先 》千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室 電話 0470-22-2961 ※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。

<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>